

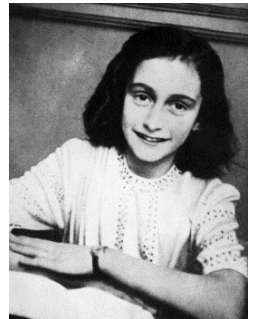
	<h1>大泉</h1>	<p>「人は学ぶ」 「人は変わる」 「人は輝く」</p>	<p>5月号 令和2年5月11日 発行者 惣田 修一 編集 菊池 知裕</p>
---	-------------	--------------------------------------	---

アンネのバラ

校長 惣田 修一

建物3階の本棚後ろにある秘密の入り口を通った時、私は胸が締め付けられる思いがしました。今から24年前、オランダのアムステルダムを観光したときの事です。その入り口は、彼女と彼女の家族が2年間を過ごした隠れ家に通じる入り口です。ナチス・ドイツの親衛隊は、この秘密の通路を通して、彼女とその家族、一緒に住んでいた仲間の家族、合わせて8名全員を見つけ出し逮捕したのです。1944年8月4日のことでした。

彼女の名前はアンネ・フランク。その時、15歳でした。明るくたくさんの友達がいて、将来作家になりたいという夢を抱いていたアンネは、何も悪いことをしたわけではないのに、ユダヤ人だということだけで逮捕されてしまったのです。そしてその後、強制収容所を転々として、1945年3月ドイツのベルゲン・ベンゼン強制収容所で伝染病にかかって息を引きとります。



私は、どうしても、その悲痛な思いを心にとどめておきたいと思い、彼女が2年間暮らしたアムステルダムの隠れ家に行くことにしたのです。足音を立てずにひっそり暮らすことがどれほど苦しかったか、警察に見つかることへの恐怖を感じながら生活することがどれだけ大きなストレスであったのか、そのことを想像するだけで胸が痛みました。

アンネ・フランクは、もともとドイツのフランクフルトで1929年6月12日にユダヤ系ドイツ人として生まれました。父オットー、母エーディト、3歳年上の姉マルゴーの4人家族で、幸せな生活を送っていました。ところが、1933年、ヒトラー政権が誕生してからユダヤ人への迫害が始まり、日常生活から徐々に自由が奪われていくのです。レストランへの立ち入り禁止、市民権のはく奪、住宅や商店への放火、学校内での明らかな差別。ユダヤ人はまともな教育を受けることができなくなっていました。そこで、1934年、フランク一家は、オランダのアムステルダムに移住しました。

アムステルダムのアンネは、陽気な性格で男子からも女子からも人気がありました。映画スターやファッションにも興味をもち、ボーイフレンドもいました。ところが、そんな日々も長くは続きませんでした。

第二次世界大戦が始まり、ドイツ軍がオランダに侵攻し、わずか1週間でオランダはドイツ軍占領下となったのです。1940年、アンネが11歳の時でした。そして、ユダヤ人迫害が始まりました。映画館、公園、プール、公衆浴場、ホテルへの立ち入りが禁止されました。アンネは大好きな映画館に行けなくなり、プールで泳ぐこともできなくなりました。さらに、お気に入りの中学校からユダヤ人中学校に転校しなければなりません。その上、どこから見ても一目でユダヤ人とわかるように黄色いダビデの星を服につけなければならず、屈辱的な日々を送らざるを得ませんでした。

そんなアンネにうれしいことがありました。1942年6月12日、アンネ13歳の誕生日に、父オットーが赤白チェック模様のサイン帳をプレゼントしてくれたのです。アンネはそのサイン帳をとても気に入って「キティー」と名付け、日記(後の『アンネの日記』)をつけることにしました。その最初のページには、こう書かれています。「あなたになら、これまで誰にも打ち明けられなかったことを何もか

もお話しできそうです。どうか私のために大きな心の支えと慰めになってくださいね。」<1942年6月12日>

それから間もなくの7月5日、姉のマルゴーにユダヤ移民センターへの出頭命令が届きました。もしも出頭すれば強制収容所に送られ過酷な労働を強いられるのです。フランク一家はあらかじめ準備しておいた隠れ家に次の日の朝引越します。そして、その日から隠れ家での生活が始まるのです。密告される恐れがあるので、昼間は音を立てることができません。カーテンは閉めたまま、トイレに入っても水を流すことはできません。食べ物もごくわずか、夜は空爆と対空砲の轟音（ごうおん）、病気になってもお医者さんに診てもらふことはできませんでした。13歳から15歳まで、君たちと同じ思春期を、どうしようもない絶望的な環境で暮らすのです。

にもかかわらず、アンネは最後の最後まで希望を捨てませんでした。逮捕寸前、彼女は『キティー』に、次のように書いています。

「自分でも不思議なのは、私がいまだに理想のすべてを捨て去ってはいないという事実です。だって、どれもあまりに現実離れしていて到底実現しそうな理想ですから。にもかかわらず私はそれを待ち続けています。なぜなら今でも信じているからです。たとえ嫌なことばかりだとしても人間の本性はやっぱり善なのだ。」 <1944年7月15日>

そして、アンネ・フランクは翌月8月4日に、逮捕されたのです。

逮捕後、部屋に残されていた『キティー』は、隠れ家の手助けをしていたオランダ人女性が、丁寧に保管していました。その後、『キティー』は、強制収容所送りとなった8人の中で唯一生き残って解放されたアンネの父オットー・フランクに渡されます。オットーは、それをタイプライターにうちこみ『後ろの家』というタイトルで出版します。後にこの本が世界各国で翻訳され『アンネの日記』となったのです。

また、『アンネの日記』に感銘を受けたベルギーの園芸家が、バラの花が好きだったアンネ・フランクの死を悼み、新種のバラに「アンネの形見」と名付け、オットー・フランクに贈呈しました。オットーさんは、このバラを自分の庭で栽培し増やし続けました。



1976年、杉並区高井戸中学校の生徒が、この「アンネのバラ」の話をきいて、「平和のシンボルとして、自分たちの学校で育てたい」という手紙をオットーさんに送りました。すると、彼は「アンネと同年代の日本の少女少女たちの夢をかなえてあげたい」と意向を示し、高井戸中学校に「アンネのバラ」3株を贈ったのです。

この話を、2年生「道徳」の授業で知った本校園芸部の生徒が、顧問の町田先生に「ぜひ大泉中에서도『アンネのバラ』を育てたいと懇願し、広島県福山市にあるホロコースト記念館から送っていただいたバラ3株が、今大泉中の中庭の花壇で咲いているのです(写真)。(実は、このバラは、今年3月の臨時休業中に大泉中に届きました。町田先生は園芸部の生徒にぜひ植樹させたいと願っていましたが、季節が廻りいつのまにか植木鉢の中で立派に開花していました。)

大泉中には、とても大きな目標があります。それは、「15の春を笑顔で迎えさせてあげたい」です。アンネ・フランクの15の春は、全く違うものでした。今回、コロナウィルスで学校は大きなダメージを受けましたが、アンネのバラが元気に咲く姿を見て、君たち全員が笑顔になれる日がきっとくると確信しています。学校再開はすぐそこまで来ています。あともうひと踏ん張りです。みんなで乗り切っていきましょう。